

高校生のキャリア意識に関する一考察

—群馬県における「ようこそ先輩！」

(高校生ボランティア・チューター小学校派遣事業)の事例に基づく考察—

A Study on career consciousness of high school students

: A case of “Activity of volunteer-tutor in elementary school” in Prefecture of Gunma

林 幸 克

HAYASHI Yukiyoshi

1. はじめに

中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(1999)においてキャリア教育の重要性が示されて以来、その在り方について様々な議論が展開されてきた。高等学校に着目すると、高等学校学習指導要領(2009)に初めて「キャリア教育」の文言が入り、同総則の中で「キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得よう配慮する」とされた。1999年の答申から10年、学習指導要領で言及されたことで、教育現場におけるキャリア教育は、今後よりいっそう推進されるものと思われる。

その一端は、高等学校学習指導要領(2009)以降の政策方針を概観すると明確である。

中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)では、「高等学校の段階においては、自らの将来のキャリア形成を自ら考えさせ、選択させることが重要である。このため、学習指導要領を着実に実施するとともに、キャリア教育の視点からは、学科や卒業後の進路を問わず、現実的に社会・職業の理解を深めることや、自分が将来どのように社会に参画していくかを考える教育活動等を指導計画に位置付けて実施することが必要である。」とされた。また、中央教育審議会答申「今後の青少年の体験活動の推進について」(2013)には、社会的・職業的自立に必要な力の育成について、「子どもたちに自らの将来を考えさせるためには、多様な年齢・立場の人や社会や職業にかかわる様々な現場を通して、自己と社会についての多様な気づきや発見を経験させることが効果的である」と記された。さらに、中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会「初等中等教育分科会高等学校部会の審議の経過について」(2013)をみると、高等学校教育に期待されるものとして、「生徒の適性や進路等に応じた課題を踏まえた教育を行うにあたっては、これからの時代が将来予測困難になっていることを見据えて、各学校が地域の実情や生徒の希望実態等を踏まえ、目標とする人間像を明確にした上で、それぞれの生徒の個性や能力を伸ばさせる教育を行うこと」が示されている。また、全ての生徒に共通に身に付けさせる資質・能力について、「社会・職業への円滑な移行に必要な力」「市民性(市民社会に関する知識理解、社会の一員として参画し貢献する意識など)」が重要な柱とされている。

では、それが学校現場でどのような形で結実しているのか、キャリア教育の具体的な実践の一つとして、インターンシップに着目してみよう。

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」(2013)では、「就業体験(インターンシップ)や社会人の講話など、キャリア教育にかかわる体験的学習を実施している」について「そのとおりである」とした高等学校の割合が、普通科74.6%、職業に関する専門学科95.9%、総合学科81.9%となっている。また、同「平成23年度

職場体験・インターンシップ実施状況等調査」(2012)では、高等学校の実施率は、国立10.5%、公立76.4%、私立41.2%、普通科58.9%、職業に関する学科80.8%、総合学科87.8%となっている。

このような実情をみると、キャリア教育はすべての高校生に必要なものであるものの、普通科では十分に行われているとは言い難い。

文部科学省「高等学校 キャリア教育の手引き」(2011)において、「普通科においては、将来を展望させ、そのために必要な能力や態度を身に付けさせる指導、とりわけ、進学する意義を明確にすることや将来の職業生活に向けた基礎的な知識・技能に関する学習の機会の設定・充実が課題である」こと、「高等教育機関への進学を希望する者が多い普通科においても、現実的に社会・職業の理解を深めることや、自分が将来どのように社会に参画していくかを考える教育活動等を指導計画に位置付けて実施するなど、キャリア教育を充実していくことが必要である」と示されている。また、中央教育審議会答申「第2期教育振興基本計画について」(2013)では、基本施策の一つにキャリア教育の充実が示され、「幼児期の教育から高等教育まで各学校段階を通じた体系的・系統的なキャリア教育を充実し、特に、高等学校普通科におけるキャリア教育を推進する」とされていることを加味すると、普通科におけるキャリア教育が重視されていることがわかる。

そこで本研究では、高等学校普通科のキャリア教育について、群馬県における「ようこそ先輩！」(高校生ボランティア・チューター小学校派遣事業)の事例に着目しながら、その成果の検証を試みる。

2. 方法

(1) 質問紙調査

2013年2月に群馬県内の高等学校普通科1校(女子校)を対象に郵送法による質問紙調査を行い、3年生163名から回答を得た。その内訳として、「ようこそ先輩！」に参加した生徒(以下、参加群)は17名、参加していない生徒(以下、非参加群)は146名であった。質問項目は、新見ら¹⁾の作成したキャリア意識尺度を用いた。キャリア意識尺度は42項目で、「とてもそう思わない」(1点)～「とてもそう思う」(6点)の6件法で質問した。このほかに、小学生との交流活動の認識(7項目)などを聞いた。

(2) 聞き取り調査

2013年2月に高校生を受け入れた小学校の教員に対して、2013年3月に高校生を派遣した高等学校の教員に対して、約60分間の半構造化インタビューを実施した²⁾。内容は、小学生と高校生が交流する意義や留意点、双方に与える影響、交流を円滑に進めるために必要なこと、交流のための事前指導・事後指導の在り方などである。

(3) 参与観察

2013年2月に、小学校2校を訪問し、活動中の高校生4名(各小学校2名)の様子を、各2日間・計4日間(1日約7～8時間)にわたって見学した。なお、本稿では、紙幅の関係上、この参与観察による分析・考察は割愛する。

3. 「ようこそ先輩！」の現況

(1) 経緯

秋田県の「小学校への高校生助手派遣プログラム」(2001年より実施)をモデルに、2003年5月の群馬県議会文教治安常任委員会での提案をきっかけに、小学校長会と高等学校長協会、市町村教育委員会と群馬県教育委員会とがそれぞれ連携し、全国に誇れる群馬方式のボランティア事業として「ようこそ先輩！」が構想された。

(2) 目的

次の3点が目的である。第1は、母校でのボランティア活動をすることを通して、高校生が社会と関わっていこうとする力を伸ばすこと、第2は、高校生自身が社会に役立つことを実感することを通して、自分自身を生かす力を養うこと、第3は、小学生が高校生と交流する中で、先輩の姿を自分の将来のモデルとして、これからの学校生活への夢や希望を育むことである。

(3) 参加資格

群馬県内の公立高等学校に在籍し、就職先や進学先が内定した高校生で、活動への熱意があり、在籍する高等学校の校長先生が推薦した生徒なら誰でも参加できる。正式には、高等学校の校長先生と小学校の校長先生が話し合い、受け入れが決まるが、母校の小学校の児童のために活動するという自覚が求められ、活動にあたっての心構えや注意事項について、事前に指導を受けて参加する。なお、2004年度に私立高等学校の生徒から参加したい旨の問い合わせがあり、群馬県私立中学高等学校協会に、2005年度の「ようこそ先輩！ 地域連絡協議会^③代表者会議」への出席を呼びかけ、参加が決まった。

(4) 実施状況

活動期間は、2月中旬から下旬にかけての2週間^④で、原則として出身小学校で活動を行うこととなっている。2003年度の事業開始から、2012年度までの実施状況は、表1に示すとおりである。高等学校の実施状況を見ると、当初約90%の高等学校が実施していたが、年々減少が続き、最近では70%を下回るようになってきている。参加者数もそれに伴い減少傾向にあり、350人近かった参加者が、250人を下回るようになってきている。男女比に着目すると、例年男子30%、女子70%となっている。小学校の受入状況は、当初は60%近くの学校で受け入れていたが、最近では50%を下回る年が続いている。受入期間に大きな変動はなく、8～9日となっている。

表1 「ようこそ先輩！」実施状況 (2003年度～2012年度)

	高等学校の実施状況 (実施校数と比率)		参加者数(人数と男女比)			小学校の受入状況 (受入校数と比率)		平均受入 期間
			全体	男子	女子			
2003年度	66校	89.2%	343人	102人(29.7%)	241人(70.3%)	197校	56.9%	8.0日
2004年度	67校	90.5%	349人	114人(32.7%)	235人(67.3%)	196校	57.3%	8.4日
2005年度	71校	78.9%	318人	101人(31.8%)	217人(68.2%)	173校	50.1%	8.8日
2006年度	70校	77.8%	267人	70人(26.2%)	197人(73.8%)	163校	47.1%	7.8日
2007年度	61校	71.8%	226人	83人(36.7%)	143人(63.3%)	145校	42.0%	8.0日
2008年度	61校	73.5%	236人	80人(33.9%)	156人(66.1%)	144校	42.4%	7.9日
2009年度	54校	66.7%	229人	63人(27.5%)	166人(72.5%)	148校	43.5%	8.4日
2010年度	52校	64.2%	224人	77人(34.4%)	147人(65.6%)	148校	43.1%	9.1日
2011年度	56校	68.3%	240人	75人(31.2%)	165人(68.8%)	145校	43.0%	9.0日
2012年度	51校	62.2%	231人	59人(25.5%)	172人(74.5%)	143校	42.9%	8.5日

(5) 活動内容

活動内容について、群馬県教育委員会学校指導課「「ようこそ先輩！」における高校生の活用について」(2003年度文書)と2012年度「ようこそ先輩！」実施要項から整理したものが表2である。

活動内容は大きく直接的支援と間接的支援に分けることができる。また、直接的支援については、教科指導と教科外指導に分類することができる。2003年度は、各々の活動内容例が具体的に示されているが、事業が定着してきたことを反映してか、2012年度は記述が簡素化されている。ただ、内容的には、大きな変動はない(下線部は2003年度と2012年度に共通している内容である)。ただ、2012年

度では、直接的支援の教科指導に「勉強が苦手な児童の支援」、教科外指導に「不登校傾向の児童への支援」があり、これは、2003年度にはなかった内容である。特別支援教育に関わる今日的な教育課題が反映されるようになってきているものと思われる。

表2 活動内容

		活動内容例	
		2003年度	2012年度
直接的支援	教科指導	<ul style="list-style-type: none"> 算数のドリル学習の指導補助 理科の観察の指導補助 家庭科の調理実習の指導補助 音楽のグループ練習における助言や補助 社会や総合的な学習の時間における調べ学習の指導補助 国語における音読等の提示 音楽における歌唱や器楽演奏(伴奏) 体育における模範演技 	<ul style="list-style-type: none"> 勉強が苦手な児童の支援 教科書の音読 ピアノ伴奏 歌唱指導の補助 跳び箱やマット運動等の模範演技や指導補助 班別の調べ学習の支援
	教科外指導	<ul style="list-style-type: none"> 道徳における体験者としての事例紹介 委員会活動やクラブ活動時の指導補助 給食や清掃指導の補助 朝や帰りに会における進行補助 全校朝会や児童集会などの集会時における整列補助 休み時間での遊びを通じた児童との交流 児童とのコミュニケーションを図るための日常的な会話 登下校時における挨拶指導や安全指導 	<ul style="list-style-type: none"> 清掃指導補助 児童会活動支援 給食指導補助 休み時間の遊び方指導 不登校傾向の児童への支援 図書室の利用に係る指導補助 クラブ活動指導補助 登下校指導補助
間接的支援		<ul style="list-style-type: none"> 国語の拡大文、社会の資料、図工や書写の作品等、学習に用いる掲示物の作成 学習プリントの作成・印刷 学習スペースの準備や片づけ(理科の実験場所、体育の練習場所等) 教室、校庭、花壇等の環境整備 校内における掲示物の整理 遊具等の安全点検補助 学校・学年だより等、各種通信の印刷 他機関から依頼された配布物の整理・クラス分け 	<ul style="list-style-type: none"> 校庭整備 掲示物の貼り替え作業 授業(教材や教具等)の準備

次に、参与観察をもとに、日課と合わせて活動内容を確認する。表3からわかるように、始業前から放課後まで、終日活動している。

表3 活動日課

	A小学校		B小学校	
	生徒A-1	生徒A-2	生徒B-1	生徒B-2
始業前	朝学習支援(1年生)	朝学習支援(1年生)	朝学習支援(4年生)	読み聞かせ支援(5年生)
1時間目	パソコン指導(1年生)		授業支援(4年生)	授業支援(5年生)
2時間目			授業支援(4年生)	授業支援(5年生)
休み時間	児童とのふれあい			
3時間目	6年生を送る会の練習(1年生)		授業支援(4年生)	児童への講話(5年生)
4時間目	授業支援(1年生)	授業支援(1年生)	授業支援(4年生)	校務員支援
給食・清掃	1年生	1年生	4年生	5年生
昼休み	児童とのふれあい			
5時間目	授業支援(1年生)	授業支援(1年生)	授業支援(4年生)	授業支援(5年生)
6時間目	委員会活動(5・6年生)	下校指導	授業支援(4年生)	授業支援(5年生)
放課後	事務作業		児童とのふれあい	

生徒A-1, 生徒A-2は, 授業支援として, パソコンでの作品作成補助や算数などの丸つけ, 進度が遅れがちな児童への個別支援, テスト監督補助などを行っていた。その他には, 教室移動時の引率や委員会活動の参観, 複数の通学班に分かれての下校指導, 児童が使う用品の整理などを行っていた。また, 休み時間は外で児童と遊び, 給食・掃除も4時間目に入った学級の児童と一緒にした。

生徒B-1, 生徒B-2も, 授業支援については, 生徒A-1, 生徒A-2と同様である。児童が作品作りなどをしている間に, 掲示物の張り替えや「上毛かるた」などの教材準備をしていた。生徒B-2は, 特技を活かしてピアノ伴奏を行う場面も見られた。また, 児童への講話として, 道徳の時間に, 高校生活で取り組んできたことなどを話す機会もあった。間接的支援として, 給食の配膳準備や図書館の整理・清掃などにも取り組んでいた。

また, 参加群に対して, 実際に取り組んだ活動を複数回答で聞いた結果が表4である。4人の事例にもみられたように, 「1. 授業補助」「2. 休み時間や放課後の遊び方指導」「3. 給食指導補助」「4. 清掃指導補助」「10. 教材の準備やノートチェックの手伝い」といった直接的支援に取り組んだ生徒が多いことがわかる。

表4 「ようこそ先輩!」で取り組んだ活動(複数回答)

										上段: 人数, 下段: %
1.授業補助	2.休み時間 や放課後の 遊び方指導	3.給食指導 補助	4.清掃指導 補助	5.児童への 講話	6.登下校指 導補助	7.発表会の 準備補助	8.係り活動 の指導補助	9.校庭の整 備	10.教材の 準備やノート チェックの 手伝い	
17	17	14	15	12	4	13	4	1	14	
(100.0)	(100.0)	(82.4)	(88.2)	(70.6)	(23.5)	(76.5)	(23.5)	(5.9)	(82.4)	

4. 成果の検証

「ようこそ先輩!」の成果について, 参加群と非参加群におけるキャリア意識の異同に着目して確認する。

(1) 質問紙調査

質問紙調査の結果から, 参加群 (n=17) と非参加群 (n=146) の得点差に有意差が認められた項目に着目すると, 参加群の特徴として, 次の3点を指摘することができる。

第1は, 「6. 友だちが困ったときには, 助けることができると思う」(0.55点差), 「10. 友だちの気持ちを大切にすることができると思う」(0.54点差), 「32. 友だちとけんかしても, うまく仲直りができると思う」(0.62点差), 「33. 友だちに悪いことをしたら謝ることができると思う」(0.49点差)という結果から, 友だちとの人間関係を良好に保つ自信があると思われるということである。

第2は, 「9. みんなと意見が違って, 自分の意見を言うことができると思う」(0.68点差), 「26. 自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う」(0.64点差)という結果から, 自分の思いを他者に伝えることについて, 自信を持っていることが考えられるということである。

第3は, 「14. 生徒は, 将来のためにしっかりと勉強すべきだと思う」(0.42点差), 「25. すぐにはできなくても, できるまでがんばろうと思う」(0.50点差), 「29. 失敗しても, あきらめずに, うまくいくまでがんばろうと思う」(0.58点差)という結果から, 未来志向で, 課題遂行意識が高いことが推察されるということである。

他方, 非参加群は, 「4. そうじや係の仕事は自分がしなくても他の人がしてくれると思う」(1.14点差), 「36. 将来どんな仕事をしたいかを今から考えなくてもいいと思う」(0.77点差)の2つの逆転項目で参加群よりも得点が有意に高く, 他人任せで, 現実逃避的な側面があることがうかがえる。

表5 「参加群」と「非参加群」のキャリア意識の比較

上段:平均値(6点満点),下段:標準偏差

	「ようこそ先輩!」		t値		「ようこそ先輩!」		t値
	参加群	非参加群			参加群	非参加群	
1.大学や専門学校ではどんな勉強するのかを知りたいと思う	5.65 (0.61)	5.37 (0.94)	n.s.	22.違う学年の人とも話をしたいと思う	4.65 (1.27)	4.41 (1.29)	n.s.
2.人から頼まれたことでも、うまくできないと、やめてしまうと思う(逆転項目)	2.12 (0.70)	2.65 (1.10)	n.s.	23.働いている人はどのようにして、その職業についてのかを知りたいと思う	5.35 (0.61)	5.12 (0.95)	n.s.
3.友だちのよいところをもっと知りたいと思う	5.29 (1.05)	5.13 (1.04)	n.s.	24.自分の未来は明るいと思う	4.53 (1.07)	4.09 (1.22)	n.s.
4.そうじや係の仕事は自分がしなくても他の人がしてくれると思う(逆転項目)	1.44 (0.51)	2.58 (1.14)	3.93**	25.すぐにできなくても、できるまでがんばろうと思う	5.12 (0.78)	4.62 (0.96)	2.05*
5.何でも最後は自分で決めたいと思う	4.18 (1.47)	4.16 (1.28)	n.s.	26.自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う	4.59 (1.06)	3.95 (1.21)	2.09*
6.友だちが困ったときには、助けることができると思う	5.24 (0.83)	4.69 (0.91)	2.38*	27.情報が少ないと、正しい答えが出せないと思う	4.94 (0.97)	4.53 (1.01)	n.s.
7.調べようと思ったら、インターネットなどを使って自分で調べることができると思う	5.53 (0.62)	5.10 (0.90)	n.s.	28.だらだらとテレビをみないようにしようと思う	4.59 (1.28)	4.07 (1.10)	n.s.
8.みんなで決めた係や仕事は、きちんとやりたいと思う	5.53 (0.72)	5.21 (0.80)	n.s.	29.失敗しても、あきらめずに、うまくいくまでがんばろうと思う	5.18 (0.73)	4.60 (0.96)	2.39*
9.みんなと意見が違っても、自分の意見を言うことができると思う	4.65 (1.17)	3.97 (1.34)	1.99*	30.落ち込んでいても、友だちとは明るく話ができると思う	4.47 (1.01)	4.38 (1.12)	n.s.
10.友だちの気持ちを大切にすることができると思う	5.47 (0.72)	4.93 (0.93)	2.31*	31.やる気になったら、集中して勉強することができると思う	5.18 (1.13)	4.82 (1.02)	n.s.
11.わからないことは、先生や友だちに聞くことができると思う	5.06 (0.97)	4.78 (1.03)	n.s.	32.友だちとけんかしても、うまく仲直りができると思う	4.82 (1.07)	4.20 (1.06)	2.31*
12.やる気になったら、家のそうじや手伝いができると思う	5.29 (1.05)	5.08 (0.99)	n.s.	33.友だちに悪いことをしたと思ったら謝ることができると思う	5.35 (0.70)	4.86 (0.94)	2.11*
13.自分がいやなことは、友だちにははっきり言うべきだと思う	4.65 (1.27)	4.73 (0.97)	n.s.	34.難しいことでも、やる気になったら、できると思う	5.00 (1.00)	4.65 (1.02)	n.s.
14.生徒は、将来のためにしっかりと勉強すべきだと思う	5.59 (0.62)	5.17 (0.83)	2.00*	35.思いやりがある人には、たくさん友だちができると思う	5.65 (0.61)	5.36 (0.87)	n.s.
15.遊びに行く前に勉強や宿題をすませるほうが良いと思う	5.00 (1.00)	4.86 (1.02)	n.s.	36.将来どんな仕事をしたいかを今から考えなくてもいいと思う(逆転項目)	1.75 (0.68)	2.52 (1.24)	2.43*
16.友だちのよくないところは注意すべきだと思う	4.65 (0.93)	4.51 (0.91)	n.s.	37.忘れ物をしないように前日から用意することが大切だと思う	4.88 (1.69)	5.08 (1.01)	n.s.
17.何かを決めるときには、情報は多いほうが良いと思う	5.53 (0.87)	5.31 (0.82)	n.s.	38.学級の係や当番の仕事は、きちんとやるのが大切だと思う	5.53 (0.80)	5.31 (0.84)	n.s.
18.学級の仕事は、みんなで協力したほうが良いと思う	5.35 (0.93)	5.24 (0.81)	n.s.	39.宿題や勉強は言われてからやれば良いと思う(逆転項目)	2.00 (1.32)	2.49 (1.13)	n.s.
19.自分ひとりで決めるよりも、人に相談してから決めたほうが良いと思う	4.88 (1.05)	4.92 (0.92)	n.s.	40.努力しない人は、仕事で失敗すると思う	4.82 (1.59)	4.78 (1.11)	n.s.
20.学校で勉強していることは、将来仕事をするとき役に立たないと思う(逆転項目)	2.77 (1.09)	3.01 (1.07)	n.s.	41.がんばって苦手なことを少なくすることが大切だと思う	5.24 (0.75)	4.90 (1.09)	n.s.
21.計画や時間を決めて勉強したいと思う	4.88 (1.11)	4.62 (1.09)	n.s.	42.遊んでばかりいると、りっぱな大人になれないと思う	4.00 (1.46)	4.16 (1.37)	n.s.

*p<.05 **p<.01

以上のことから、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)の中で「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素として示されている基礎的・汎用的能力、特に人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力が、参加群は高いのではないかと考えられる。

表6 小学生との交流活動 「はい」の回答

							上段:人数, 下段:%
1. 小学生との交流は楽しかったですか。	2. 今後も小学生と交流する活動があれば参加したいですか。	3. 小学生と交流する活動を友だちや後輩に薦めたいですか。	4. 小学生と交流する活動は自分の将来に役立つと思いますか。	5. 小学生と交流する活動は自分を見つめ直すきっかけになりましたか。	6. 小学生のために自分にできることがわかりましたか。	7. 社会で自分の能力や個性を発揮できる場があれば関わりたいですか。	
16 (94.1)	16 (94.1)	16 (94.1)	17 (100.0)	16 (94.1)	17 (100.0)	17 (100.0)	

また、小学生との交流活動の認識について、「はい」の回答が、「5. 小学生と交流する活動は自分を見つめ直すきっかけになりましたか。」94.1%、「6. 小学生のために自分にできることがわかりましたか。」100.0%であることを勘案すると、上記答申に示されている自己理解・自己管理能力も高いものと思われる。

(2) 聞き取り調査

次に、教員対象の聞き取り調査の結果から、参加群の小学校での学びについて、何を学んでいるのか、そして、それがどういう効果をもたらしているのかを検討する。下線は、筆者が付記したものである。

A教員は、高校生との事前の打合わせ^⑥の時のことについて、次のように回答している。

特に高校生っていうことで、今までは生徒ということ、教えられる立場での見方だったのが、それがボランティアといえども、今度は教員側のサイドに立っての教えるというか、あるいは支援するか、そういうような立場になるんで、その意味では今までの立ち位置が全く逆の方向になるので、かなりいろんな意味で、見方っていうことを少し教えられる部分があるんじゃないかなっていうこと(中略)当然2週間といいながらも、子ども同士のトラブルがあったり、あるいは本人と子どもとの関わりの中でちょっとうまくいかないところがあったりすると思うんで(中略)当然要領分かんないことがあると思うんで、そのことは「担任でもいいですし、近くの先生でもいいし、私もいいけど、報告・連絡・相談をしていながら対処していきましょう」と、あるいは「トラブルをちょっと見たら、それも、そういうことを報告して、先生の方に入ってもらいましょう。そのことは極めて大事なことでなんで迅速にやってください」っていうふうに話しました。

小学校現場において、支援する立場から物事を捉え、トラブル対応については周囲の先生と情報共有しながら迅速に行うことが求められることが示されている。これは、先述した課題対応能力の涵養につながる側面であると思われる。また、B教員は、高校生が毎日提出する活動日誌の指導者のコメントについて、筆者がその記述量が豊富であることを指摘した後に、次の回答が続けられた。

やっぱり具体的に「今日は引率の先生が来てくれて、とっても助かった」と。「早く子どもたちに配ることができてよかったよ」って、まあ、その程度なんですけどね。でも、書くことで、また、自分のやったボランティアの様子が評価されると、またやる気になるじゃないですか。(中略)受け入れる側が、自分の出身校の卒業生を、そういう意味で、もう少し育てようとか、そういう気持ちがあれば

ば書くし、忙しければ、書く気持ちがあってもできなくなるんじゃないかと思いますけどね。

さらに、C教員には以下の口述があった。

実際に教えてみれば大変じゃないかな、教えることと、生徒が、子どもがね、ちゃんと指示どおりに動いてくれるかどうか、かなり難しいところがあったと思いますよ。あとは、これね、やっぱりコミュニケーションが苦手な子が…。子どももいるかもしれないけど、案外この中にもいるんですよ。だから、実際に、希望はしてみるんだけど、実際に今度行ってみると、なんかうまくコミュニケーションできないというのは、感想文にありましたね、一つ。(中略)おとなしい子だから、ちょっとそこが、「でも、今後、看護師さんになるんで、これはちょっと自分がどのようにしたらいいか」って、悩んでる姿がね。

これらB教員、C教員の回答は、人間関係形成・社会形成能力に関する側面が示されていると思われる。前者は、活動日誌を通して間接的な人間関係形成・社会形成能力を育て、後者は、コミュニケーションの難しさを体感しながら、それでも将来の目標との関連で、その克服が求められることを学んでいることが推察される。これは、自己理解・自己管理能力にも通じるものである。質問紙調査で確認したように、人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力、自己理解・自己管理能力を育成する場が確保されており、周囲もそれを高校生に対して期待・支援していることがうかがえる。

5. おわりに

(1) キャリアプランニング能力の向上のために

基礎的・汎用的能力の中の3つに関する事項は認められたが、もう一つの要素であるキャリアプランニング能力については、明確な成果が見出せなかった。そこに「ようこそ先輩!」の課題と改善の可能性のあるものと思われる。C教員の口述を見てみよう。

みんなそうだと思うんだけど、自分が何か得意なものを持ってると子は、それを絶対教えてほしいなと思います。だから、どうだっただろ、Bなんか行って、B-1さんなんかは明るくて、彼女は陸上部だから、とにかく明るさが持ち味だったと思うんだけどね。ほいで、あと、B-2さんは、あれは音楽部だったから、その辺のところがうまく使えるような一面でも出ればいいんかなっていう。A-1さんも元ハンドボール部だし、それで、ピアノで。ただ、「ピアノ弾く機会がなかった」とか言ってたんだよね。(中略)これから高校3年生終わって、今度は大学行くにしろ、就職にしろ、その入り口を見たんじゃないかな。垣間見たんじゃないかと思いますね。大変なんだなと思ったんじゃないかなと思いますけどね。

大学生の教育実習生とは違い、教職・教科に関する専門的な知識・技能が十分にあるわけではない高校生にしてみれば、自分の得意なことを児童に披露できる場があることは重要である。自分のやってきたことが認められることは今後の学習意欲の維持・向上にも寄与するであろうし、自分自身を振り返る機会にもなる。それは、自分の将来の生き方を考える場ともなり得るもので、キャリアプランニング能力の向上の一助になると思われる。

そうした得意なものがないとしても、自分の高校生活を振り返り、伝える機会があれば、それだけでも効果が期待できるはずである。それが、「児童への講話」(表4参照)である。B教員の口述を見てみたい。

あとは「最後に在校生に話す機会を設けるよ」ってというようなことも、「え、聞いてません」なんてね、「え、そうなんですか」なんていうこともあるんで、若干あれですかね、高校教育課のスタンスと、送り出すその高校側のスタンスと、受け入れ側の小学校とのスタンスが、ちょっとずつ、ずれてるように感じもしないではない。

「児童への講話」は、参加群17名中12名が行っているが、全員ではない。また、活動内容（表2参照）を見たとき、2003年度は「道徳における体験者としての事例紹介」が示されていたが、2012年度は例示がされていない。事前指導の在り方とも関わってくるかもしれないが、「ようこそ先輩！」の実施関係者間で意思統一をして、活動内容として確立させることが求められる。それに関連して、交流する小学生の発達段階も考慮する必要がある。A教員の口述を見てみよう。

高学年になると、こういう目的っていうんで、当然相手を見て、自分の方の行動もみましますし、自分の将来・進路みたいなことについても、そこら辺の部分での関わりっていうの作れると思うけど、低学年については、特に遊びっていうことですかね。

高校生のみならず、小学生のキャリア意識を啓発するという意味では、高学年との交流が望まれる。低・中学年との交流も人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力、自己理解・自己管理能力の育成のためには重要であるが、小学生・高校生、双方のキャリアプランニング能力の育成まで視野に入れると、高学年が妥当であると思われる。

以上のことから、高校生が小学校高学年と、自分の得意なことを活かしながら交流することを前提として、「児童への講話」に取り組むことがキャリアプランニング能力を高めることにつながるのではないかと考えられる。

(2) 今後の課題

紙幅の関係で本稿では詳述できなかったが、学習効果を高めるために、事後指導の在り方についても検討する必要がある。「ようこそ先輩！」に関する留意事項で、事後指導について、「高等学校は、派遣生徒に活動報告（感想文等）をまとめさせ、活動の振り返りを行わせるとともに、生徒のプライバシーに十分配慮しつつ、発表会を開催するなど、他の生徒に対して本事業の趣旨を周知するよう工夫する」とあるが、実際は、感想文の提出に留まり、十分な事後指導ができていないことがわかってきた。今後の重要な検討課題である。

また、事例的に取り上げてきたこともあり、質問紙調査も聞き取り調査もサンプル数が十分ではない。特に、参加群は少なく、今回のデータだけで結論づけることは早計である。また、認められた学習効果も、「ようこそ先輩！」だけの成果によるものと論じることには慎重を期すべきである。データを蓄積しながら、継続的に定量的調査・定性的調査を進めることが必要である。

【注記】

- (1) 新見直子・前田健一「小中高校生を対象にしたキャリア意識尺度の作成」『キャリア教育研究』27 (2), 2009, pp.43-55.
- (2) 聞き取り調査を行った教員は、A小学校教員1名（以下A教員）、B小学校教員1名（以下B教員）、C高等学校教員1名（以下C教員）である。なお、A小学校、B小学校は後掲の表3に対応する。また、C高等学校は、質問紙調査を行った学校である。
- (3) 地域連絡協議会とは、高校生の受け入れ態勢整備のため、群馬県内5地区（中部・西部・吾妻・利根・東部）に設置された小学校長、高等学校長を中心とした組織である。

- (4) この時期は、自宅学習期間で、3年生は比較的自由に「ようこそ先輩！」も含めた諸活動に取り組むことができるようになっている。
- (5) 2012年度「ようこそ先輩！」実施要項によると、事前打合せについて、「参加生徒は、高等学校の教職員と相談の上、受入小学校と事前打合せの日程等を調整する。その後、受入小学校に出向き、担当者と事前打合せを行う。」とされている。

* 本稿は、平成24年度財団法人文教協会研究助成を受けて行った研究成果の一部である。